

令和 2 年 7 月 2 日現在

機関番号：34509

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K17260

研究課題名(和文) 在中国の日本人の文化適応に関する社会心理学的研究

研究課題名(英文) Social Psychological Study on Cultural Adaptation of Japanese in China

研究代表者

毛 新華 (MAO, XINHUA)

神戸学院大学・心理学部・准教授

研究者番号：90506958

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、中国の在留日本人に焦点を当て、彼らの中国文化適応を「中国人との対人関係の形成」という視点から切り込み、社会的スキルの観点から、適応を促進する手段を講じることである。etic-emicアプローチを用いて、社会的スキルの文化共通の部分と文化独自の部分を区別し、一連の研究を通して、日本人学生を対象に、「社会的スキルの中国文化的要素」の頑健性を確認した。そして、実際中国滞在中の日本人留学生に文化適応のSSTプログラムを適用し、その効果を確認した。本研究で考案されたプログラムは中国の在留日本人の中国文化適応の促進に役に立つと言える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義：従来の日本人の異文化適応については、主に日本人の欧米文化への適応に焦点が当てられた。本研究は、日本人の東アジア文化内の文化適応の結果をもって、従来の東洋vs西洋に関する文化適応の理論を拡張・展開する契機となった。

社会的意義：グローバル社会の進展とともに、中国に長期滞在し、中国人とコミュニケーションを取らなければならない日本人が多い。本研究で実施した文化適応のトレーニングは彼らの中国人との対人関係の質の向上につながった。本研究の知見は、今後、日中間の人的交流のさらなる活発化に資し、日中両国の「草の根」の交流への貢献を期待することができる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to promote adaptation of Japanese residents in China from the perspective of "Building good interpersonal relationships with Chinese people". We used the ethic-emic approach distinguish the culture-general and culture-specific parts of social skills which are important to cultural adaptation. Through a series of studies, (1) The existence of "Chinese cultural component of social skills" was confirmed from Japanese students who are living in Japan. (2) We applied the SST program for cultural adaptation to Japanese international students in China and confirmed its effectiveness. It can be said that the program devised in this study is useful for the promotion of Chinese culture adaptation of Japanese residents in China.

研究分野：社会心理学 文化心理学

キーワード：文化適応 社会的スキル 在中国の日本人

1. 研究開始当初の背景

グローバル化に伴う日本と中国の交流の変化 日本と中国は、地理的に近い故に、およそ二千年前から、文化的な交流があった。グローバル化に相まって、中国は、経済発展を目標にして、1980年代から「対外改革開放政策」を始めた。その時から、多くの日本企業が中国に進出し始め、2000年代の中国の経済高度成長に伴い、日本と中国の間での経済交流や文化交流は、現在、これまでにない活況を呈している。中国に長期にわたって多くの日本人が滞在しているとの状況があり、彼らは、中国人との対人関係を形成する必要がある。

似て非なる日本と中国 日本と中国の昔から始まった文化的交流により、日本文化は中国文化から大きな影響を受けてきた。それ故、日中両国は、儒教、漢字、書道、茶道など、多くの共通の文化的アイテムを有している。文化比較に関する先行研究からでも、日本人と中国人はともに、「集団主義文化」(Triandis, 1995)、そして、「高コンテクスト文化」(Hall, 1976)に位置づけられて、自分自身が他者と「相互協調的」に振る舞っている(Markus & Kitayama, 1991)。

しかし、日中比較を行う心理学者及び社会学者たちは、日中文化の間の共通点を認めつつも、両国国民の相違点を指摘している(末田, 1998)。西田(2007)は中国の日系企業における中国従業員と日本人上司とのコミュニケーション上のトラブルを報告している。日中間のコミュニケーションの必要性がますます高くなっている中、日本人と中国人の円滑なコミュニケーションを促進するには、異文化適応が重要な問題となっている。

本研究では、多くの日本人が中国に滞在している現状を踏まえて、日本人が中国文化の対人関係に適応する可能性を探りたい。その中では、新しい文化における新しい対人関係の適応に役に立つ「社会的スキル」および社会的スキル・トレーニング(Social Skills Training : SST)に注目し、中国文化の社会的スキルを促進する SST のプログラムを日本人に適用し、その効果を検証しようとする。

社会的スキルの定義と特徴 本研究では、相川(2009)の「対人的場面において、相手の適切かつ効果的な相互作用を引き出せる言語的・非言語的の行動、そしてこれらの対人行動を発見する認知プロセス」という社会的スキルの定義に従って、社会的スキルの重要な特徴中の 2 つに注目する。一つは、社会的スキルの「文化特性」で、もう一つは、「向上可能性」である。

社会的スキルの文化特性 「文化特性」については、Berry(1989)の Etic-emic アプローチに則り、社会的スキルは「文化共通的」な部分と「文化特有的」な部分に分けることができる。「文化共通的」な社会的スキルは、どの文化においても多くの人々にとって必要なスキルのことを指し、「文化特有的」な社会的スキルはそれぞれの文化に根ざしているスキルを指す。例えば、欧米社会にアサーションが重要であるのに対して、アジア人には、「調和」がより大事である。アジア文化圏の中でも、多くの研究で対人関係の特徴が異なると指摘されている中国と日本のような国同士で、重要視されている社会的スキルの種類が異なっている。Takai & Ota (1994)は日本文化にある「腹芸」や「以心伝心」などの特徴を強調しているのに対して、中華圏における儒教の「関係主義」から中国人の対人行動を説明することができる。「関係主義」において強調されているのは、相手の顔を立てる Mianzi 志向、そして相手とつながりをもつ Guanxi 志向、さらに、相手から援助される Renqing 志向である。

社会的スキルの向上可能性と SST とそのアプローチ Argyle (1967)が提示したモーターモデルに基づき、社会的スキルが SST による向上可能性が説明された。参加者の「認知」、「感情」、「行動」に焦点を当て、これまでに多くの SST のプログラムが開発され、実践が行われた。本研究では、社会心理学の立場に立つ「体験学習(Kolb, 1984)」に由来するラボラトリー・メソッドによる体験学習(Experiential Learning using the Laboratory Method : ELLM)の方法に従って、参加者の「認知」、「感情」、「行動」の諸側面を総合的に向上させることを試みる。

文化要素考慮した文化内 SST ELLM モデルの考え方と有効性に基づき、また、先行研究の SST に文化的要素への配慮が不十分であることを踏まえ、毛・大坊(2012, 2016)では、中国人を対象とした中国文化適応の ELLM の SST プログラムの開発と効果検証を試みた。それらの研究では、SST プログラムとして、前述した文化共通的と文化特有的な観点、とりわけ中国文化において重要視されている“Mianzi”, “Renqing”, “Guanxi”などの対人的要素を取り入れたものを開発した。これらの文化的要素を十分に身につけていない、他の中国人との対人関係に悩んでいる中国人大学生を対象にプログラムを実行した結果、参加者の各要素における得点、並びに文化共通のスキルの得点の両方が向上される効果が示された。これらの結果は、毛・大坊(2012, 2016)で開発された SST プログラムの「文化的要素」の有用性を示した。

異文化適応のための SST—異文化トレーニング(Cross-cultural training, CCT) 冒頭で述べた「グローバル化」の影響で異文化適応の求められる機会が急増している中、文化を跨ぐ文化間の移動者にとって、まったく新しい文化において新しい対人様式をはじめとする様々なことに適応するには、CCT という概念が提起される。CCT は、異文化間の適応とコミュニケーションを改善するために感情的、行動的、認知的変化を引き出すことを手助けするトレーニング(Landis, Bennett, & Bennett, 2004)である。CCT のトレーニングの次元である「認知」、「感情」、「行動」は SST と異ならないため、SST で行われている方法論は CCT に活用することができると考えられる(Gudykunst & Hammer, 1983)。

CCTの効果検証について CCTの向上効果の検証に、Sit, Mak, & Neill(2017)が指摘しているように、参加者が自ら報告する方法は主流となり、測定の対象は異文化間の感受性、文化的知性、知覚される文化的能力などに焦点を当てている。

しかし、回答者の「主観的な判断」や「思い込み」、さらに「社会的望ましさ」という自己報告の質問紙の欠点が懸念される。CCTの効果評価を検討するのに、自らの報告が重要であるとともに、本人と相互作用を行っている「他者」や本人の行動を見ている「観察者」(Blake & Heslin, 1983)など、評価が客観的に行うことのできる視点での検討が必要である。

また、測定対象の「異文化そのものに対する感覚や考え方」に偏重し、ある特定の文化への適応に関する議論が不十分である。「文化共通」と「文化特有」の両視点を兼ねる CCTを目指す必要がある。

2. 研究の目的

以上の社会的および理論的な研究背景を基に、本研究は、社会的スキルの文化的特性を踏まえて、日本人を対象にして中国文化への CCT を実施し、日本人の中国文化適応を検討することを試みる。その際に、上記に言及した中国文化的な要素が考慮された毛・大坊(2012, 2016)のプログラムを活用する。

また、検証の方法には、①先行研究で開発されている信頼性と妥当性の確認されている社会的スキルの自己報告尺度を用いて、参加者の CCT 前後におけるスキルの変化を検討する。②会話の場面を設けて、CCT 参加者の他者との相互作用に対する参加者自身の評価、そして、客観性を増すという意味で会話相手による評価を導入する。さらに、③観察実験を設けて、CCT の参加者の会話映像を第三者に視聴させ、参加者の会話での相互作用に対する評価を得て、CCT の評価の客観性を高める。

以上の目的は二つのステップに分けて実行する。ステップ1では、日本にいる日本人を対象に CCT を実施し、理論上にある「社会的スキルの文化的要素」の頑健性を確認し、「社会的スキルの文化的要素」の異文化適応研究への適用の土台を固める。ステップ2では、「文化的要素」の可能性を十分に生かし、実際に、在中国の日本人の中国文化適応の促進に関する可能性を探る。

3. 研究の方法

研究方法の概要

本研究では、上記で言及されている「目的」と二つのステップと対応し、大きく分けて2つの研究を実行した。このうち、研究1は、日本にいる日本人を対象に、研究2は在中国の日本人を対象とした。研究1では、日本人大学生に、毛・大坊(2016)で使用された SST のプログラムを実験群に対して実施し、統制群には社会的スキルとは無関係なプログラムを実施した。一連の文化に基づく(中国文化・日本文化・文化共通)の社会的スキル尺度を、(実験群・統制群)2種類のトレーニングの前後に全ての参加者に実施した(研究1-1)。また、参加者の一部が CCT の前後に会話実験に参加し、各会話実験で自分自身の行動を評価するように求められた(研究1-2)。さらに、観察実験を設けて、ビデオで録画された会話シーンをを用いて、会話実験の参加者の行動を評価するよう中国人大学生に依頼した(研究1-3)。そして、研究2では、研究1の方法を踏襲し、在中国の日本人留学生を対象として研究1と同じ実験を実施した。

研究1-1の方法

参加者 関西の大学で募集した日本人大学生 62名(男性 23名、女性 39名；平均年齢 20.12±0.89)を対象とした。62名をランダムに実験群(29名)と統制群(33名)に振り分けた。

プログラムおよび実施 毛・大坊(2016)は、「体験学習」の基本形式を参考に、基礎編と文化編あわせて6セッションで構成された中国人用 SST プログラムを開発した。基礎編は、大坊ら(2000)が用いたプログラムを参照し、参加者の「人とのコミュニケーションをとるための言語的/非言語的なスキル(e.g. 視線・表情の使い方；自己表現)」、「集団の中で人と関わるスキル(e.g. 問題解決の仕方)」、そして「自他共存のための考え方(e.g. 価値観への理解)」など社会生活における基本的な(文化一般の)社会的スキルをトレーニングした。一方、文化編は、中国文化の要因(Mao & Daibo, 2006)などを参考に、中国における「相手の面子の維持の仕方」や「周りの人を助ける重要性」や「人間関係ネットワークの働き」を網羅した内容を用いて、ロールプレイ場面や討論課題を設定し、プログラムを作成した。このプログラムは通常1セッション1時間、6日間連続で実施する。本研究では、このプログラムをそのまま日本人大学生の実験群に実施した。一方、統制群は、相川(1998)を参考に、社会的スキルと無関係なプログラムを実施した。

社会的スキルの意識レベルの測定 プログラム実施の開始前と終了直後において、下記の自己報告式の社会的スキル尺度を用いて、参加者の社会的スキルを意識レベルで測定した。①中国人大学生社会的スキル尺度 (ChUSSI, 相手の面子(PM)、「社交性(SA)」、「友達への奉仕(AB)」、「功利主義(CO)」の4因子, Mao & Daibo, 2006), ②KiSS-18(社会生活で一般に必要と考えられるスキル, 菊池, 1988), ③日本的対人コンピテンス尺度 (JICS, 「察し能力(PA)」、「自己抑制(SR)」、「上下関係の調整(HRM)」、「対人感受性(IS)」、「曖昧性への耐性のなさ(TA)」の5因子, Takai & Ota, 1994)。本研究では、①～③までの尺度の内容を、順に中国文化、共通文化、日本文化の社会的スキルを反映するものと位置づけて使用した。

研究 1-2 の方法

参加者と会話内容 研究 1-1 の参加者のうち 39 名(実験群 19 名, 統制群 20 名)を会話協力者(参加者と同性)と「キャンパスライフ」をテーマに, 5 分間の自由会話を行わせた。同じ会話相手との繰り返し効果为了避免するため, 参加者は二回の会話のいずれも, 初対面の相手と会話するようにした。

自己評価による社会的スキルの行動レベルの測度 トレーニング実施の前後において, 上記の会話実験を設定し, いずれの会話後, 会話中の行動について参加者に自己評価をさせた(SST プログラムのモジュールやねらいに基づき, 独自開発した 10 項目の評定尺度; e.g. あなたは先ほどの人との話を始めるのがどれほど上手だと思いますか?(文化共通), あなたが話をしているとき, どれほど先ほどの人の面子のことを気にしていますか?(中国文化))。

研究 1-3 の方法

観察者 中国・大連にある大学で募集した中国人大学生 20 名(男性 10 名, 女性 10 名; 平均年齢 20.20 ± 1.61)であった。

刺激 観察者に提示した刺激は, 研究 1-2 において SST プログラムの前後に行われた, トレーニングの参加者と会話協力者の 2 人による会話の音声映像 78 本(参加者 39 名のトレーニングの前と後で撮影した「キャンパスライフ」をテーマとした日本人大学生の 5 分間の自由会話)であった。会話は日本語で行われたため, それぞれの映像に, 会話内容の中国語訳字幕を付けた。

質問紙 研究 1-1 で述べた実験群に実施したプログラムの基礎編・文化編にあるモジュールに照らし合わせ, 独自に作成した 10 項目の評価尺度(例えば, 「参加者が話を始めるのがどれほど上手だったか」(基礎スキル 7 項目), 「参加者がどれほど相手の面子を気にしたか」(文化スキル 2 項目))であった。本研究では, トレーニング参加者 1 名に対する 20 名の観察者から得た 10 項目の合計得点($\alpha = .88$)の平均値を評価得点とした。

手続き すべての観察者に対して, 78 本の映像をランダムな順序で 1 本ずつ呈示した。呈示が終了するごとに, 観察者にトレーニング参加者の会話中の行動について, 前項の質問紙を用いて評価してもらった。なお, 刺激映像本数が多いため, 評価手続きは複数日に分けて行われた。

研究 2 の方法

参加者 中国・大連にある二つの大学に留学している日本人留学生 30 名(最終的な分析対象は 50 代以上の参加者 4 名を除いた 26 名)を対象とした。

プログラムおよび実施 社会的スキルの意識レベルの測度, 自己評価による社会的スキルの行動レベルの測度は研究 1-1, 1-2 と同様であった。ただし, 社会情勢の影響(コロナウィルス感染症)により, 研究 1-3 のような観察実験を(2020 年 3 月予定)実行できなかった。

4. 研究成果

研究 1-1, 1-2 の結果と考察

社会的スキルの意識・行動レベルの変化を検討するために, 意識レベルの尺度(ChUSSI, KiSS-18, JICS), そして参加者の会話行動の自己評価のそれぞれを従属変数に, 実験条件(実験群・統制群)×実施時期(SST 前・SST 後)を独立変数とした 2 要因の分散分析を行った。SST 前の実験群と統制群に得点差がないことを確認した上, 要因の主効果および交互作用を検討した。

実験条件の主効果はいずれの尺度においても認められず, 実施時期の主効果は ChUSSI, KiSS-18, JICS で有意だった(順に, $F(1,60)=12.51, 5.41, 7.46$ $p < .01 \sim .001$; SST 前 < SST 後)。さらに, ChUSSI, KiSS-18 という意識レベルの尺度, そして会話実験の自己評価にある中国文化的な項目群(2 項目)のいずれも, 実験条件×実施時期の交互作用が有意であった(順に $F(1,60)=9.08, 4.80$, $p < .05 \sim .01$; $F(1,37)=5.10$ $p < .05$)。それぞれの尺度の単純主効果を検討した結果, いずれも実験群においてのみ, SST 後の得点が SST 前より高かった。

以上の結果より, 文化共通的要素と中国文化的要素を配慮した, 中国人用 SST のプログラムは, 日本人大学生に対しても, 意識レベルにおいて, 中国文化と共通文化のスキルの向上に効果がみられた。また, プログラムは行動レベルにおける自己評価のうち, 中国文化の部分に影響を与えている。これらの結果は同じ SST プログラムを用いて中国人大学生を対象とした研究(毛・大坊, 2016)の結果と一致している。中国文化的要素と文化共通的要素がプログラムに盛り込まれると, 中国人・日本人ともに, 中国文化と文化共通のスキルが向上される。このことから, 本研究で用いた SST プログラムは文化的弁別性を有すると言えよう。

研究 1-3 の結果と考察

トレーニング開始前に, 実験群と統制群の会話行動に対する観察者評価の等質性を確認した。実験条件を独立変数に, 観察者評価得点を従属変数とした t 検定の結果, 有意差がないことが確認された($t(37) = 1.37$, $n.s.$)。

SST の効果を検証するために, 同一トレーニング参加者の前と後に対する観察者の行動評価尺度の得点の増加量(トレーニング後からトレーニング前の得点を引いて得た差分)を基準変数

に、実験条件(実験群/統制群)、そして前述したトレーニング参加者の中国文化スキルの自己報告尺度(ChUSSI)における実験前の得点(以下、ChUSSI_{pre}とする)を説明変数とした階層的重回帰分析を行った。なお、ChUSSI_{pre}を説明変数としたのは、トレーニング前の参加者のスキルが観察者による行動評価に影響すると考えられるためである。

Step1には、実験条件(統制群=0、実験群=1)とChUSSI_{pre}の得点(中心化処理を施された)の主効果項を、Step2には、2つの主効果項の交互作用項を投入した。いずれのStepにおいて、主効果がみられず、Step2において、2つの主効果項の交互作用($\beta = -.27, p < .10$)が有意であった(Table 1)。交互作用が有意となったため、単純傾斜の検定を行った。「統制群と実験群ではSSTの効果がどう異なるか」を検証することが本研究の目的であるため、「ChUSSI_{pre}の得点」の高低のそれぞれで実験群と統制群の増加量の差のみを検討した。その結果、ChUSSI_{pre}の得点の高群(+1SD)における実験条件の単純主効果がなかったのに対して、ChUSSI_{pre}の得点の低群(-1SD)における実験条件の単純主効果($\beta = .43, p < .10$)の有意傾向は確認された。実験群が統制群と比べて、会話中の行動評価得点の増加量が大きい傾向が示された。すなわち、トレーニング前に本人が自覚している中国文化のスキルが低い者では、SSTによってスキルが向上したと推察される。これらの結果により、中国文化を反映した本研究のSSTプログラムの日本人学生に対する効果を、より客観的かつ妥当な中国人観察者の視点から確認できた。

研究1の総合考察

日中両国の間に人的交流が拡大する中、これまでの参加者本人(研究1-1, 1-2)、観察者(研究1-3)で確認された効果を踏まえ、今後、本研究のプログラムを、中国に滞在し、中国文化に適応する必要性のある日本人留学生や企業の駐在員などに実施することで、彼らのより良い中国文化適応につながる可能性が考えられる。

研究2の結果

在中国の日本人留学生参加者の社会的スキルの変化を検討するために、すべての尺度の因子得点を従属変数に、実験条件(実験群・統制群)×実施時期(SST前・SST後)を独立変数とした2要因の分散分析を行った。ChUSSIのAB因子以外、SST前の実験群と統制群に得点差がないことを確認した上、要因の主効果および交互作用を検討した。

実験条件の主効果はPM, CO, PA, HRM, ISで有意 or 有意傾向であった(順に、 $F(1,22\sim24) = 4.10, 4.46, 4.53, 3.37, 3.07, p < .10\sim.05$; 統制群 < 実験群)、実施時期の主効果はTA因子で有意傾向であった($F(1,24) = 3.09, p < .10$; SST前 > SST後)。さらに、CO, HRM, IS因子では、実験条件×実施時期の交互作用が有意 or 有意傾向であった(順に $F(1,23\sim24) = 4.83, 3.74, 5.47, p < .10\sim.05$)。それぞれの尺度の単純主効果を検討した結果、いずれも実験群においてのみ、SST後の得点がSST前より高かった。

本研究では、文化共通的要素と中国文化的要素を配慮した中国人用SSTのプログラムを在中国の日本人留学生を対象に実施した。その結果、実験群においてのみ、中国文化を反映する「他者と関係ネットワークを構築する」功利主義因子の得点は有意に高くなった。中国現地で生活している日本人学生は、トレーニングを通して、資源を得る上で必要不可欠な人的ネットワークの重要性に気づいたと考えられる。しかし、他の中国文化要素に関係する因子の得点や文化共通的のスキルの得点に向上効果をみられなかった。中国文化因子のSST前の得点に対して、日本国内にいる日本人大学生を対象とする研究1-1と比較した結果、研究2の中国現地にいる日本人留学生の得点が高くなっている。つまり、留学を志し、中国で一定期間滞在している研究2の対象者の性質に、初期値にある種の天井効果が発生させた。そのため、SSTによってもたらされる効果が限定的になった可能性があるかと推測される。一方、日本文化のスキルのうち、上下関係調整スキル(HRM)やメッセージを婉曲に伝えるスキル(IS)が向上した(初期値は研究1-1と変わらず)。毛・大坊(2012)の中国人を対象とするSSTでは、HRMも向上した。つまり、この因子は中国文化にも通用する可能性がある。資源を獲得するために相手とコネを構築するのに必要不可欠な「功利主義」のスキルの向上と連動し、中国文化にでも必要な目上の人々との関係の調整や目的を婉曲に伝えることが中国で生活を送る日本人留学生にとって重要だと認識されたのであろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 毛新華・清水寛之	4. 巻 2
2. 論文標題 訓示的教示アプローチによる日本人の中国文化適応の促進 - 大連市（中国）の在留邦人を対象とした異文化適応セミナーの効果 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 神戸学院大学心理学研究	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 毛新華・大坊郁夫	4. 巻 18
2. 論文標題 中国人大学生社会的スキル尺度(ChUSS1)の短縮版作成の試み	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 対人社会心理学研究	6. 最初と最後の頁 113-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） info:doi/10.18910/70548	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 毛新華	4. 巻 6
2. 論文標題 文化的社会的スキル・トレーニングのプログラムの効果ー中国人大学生を対象とするー	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 モチベーション研究	6. 最初と最後の頁 67-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 毛新華・大坊 郁夫	4. 巻 32
2. 論文標題 中国文化要素が配慮された社会的スキル・トレーニングプログラムの効果：中国人大学生の自他評価からみた意識と行動の変化を中心とする検討	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 社会心理学研究	6. 最初と最後の頁 22～40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://dx.doi.org/10.14966/jssp.0870	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計25件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 7件）

1. 発表者名 毛新華・清水寛之
2. 発表標題 言語的教示による日本人の中国文化適応の促進 - 大連市（中国）の在留邦人を対象とした異文化適応セミナーの効果 -
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 毛新華・木村昌紀・胡金生
2. 発表標題 在中国日本人留学生の中国文化適応に関する社会的スキル・トレーニングの試み
3. 学会等名 日本社会心理学会第60回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 木村昌紀・毛新華・胡金生・小林知博
2. 発表標題 集団主義文化における対立的討議の実験研究 対人葛藤と言語・非言語行動による対処方略に関する日本人と中国人の比較
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masanori Kimura, Xinhua Mao, Jinsheng Hu & Chihiro Kobayashi
2. 発表標題 Experimental study of confrontational discussions in collectivistic cultures: Comparison between Japanese and Chinese people.
3. 学会等名 the 13th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 毛新華・安藤清志・杉若弘子・清水由紀・仲真紀子・林萍萍・江聚名・朴喜静・Sumlut Roi Sawm・大坊 郁夫
2. 発表標題 日本心理学会企画シンポジウム「留学生ネットワーク」の活用を考える
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 毛新華・木村昌紀
2. 発表標題 中国文化を反映した社会的スキル・トレーニングは日本人大学生の行動を変えるのか？ 中国人観察者によるトレーニング効果の客観的検証
3. 学会等名 日本社会心理学会第59回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 毛新華
2. 発表標題 個人の経験から見る心理系留学生の課題点と解決策 留学生ネットワーク設立への期待を込めて
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会 日本心理学会企画シンポジウム：日本心理学会留学生ネットワーク（仮称）設立に向けて
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 毛新華
2. 発表標題 留学生の日本文化適応と社会的スキル
3. 学会等名 公益財団法人 榎山奨学財団（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 毛新華
2. 発表標題 日本人の中国文化適応に向けて
3. 学会等名 日本国在瀋陽総領事館後援 神戸学院大学心理学部 & 大連ルーキー会コラボ企画（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 毛新華
2. 発表標題 対人コミュニケーション - 利用者やその家族と円滑に思いを交わすために -
3. 学会等名 神戸市福祉協議会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 毛新華
2. 発表標題 アジアの若手研究者交流の活性化
3. 学会等名 東洋大学大学院社会学研究科主催 日韓（成均館大学・東洋大学）共同セミナー アジア社会心理学の最前線（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 毛新華
2. 発表標題 ストレスの緩和 心からの再スタート
3. 学会等名 中華人民共和国在大阪総領事館館員を対象とする心理学講座（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 毛新華・木村昌紀
2. 発表標題 中国文化要素の社会的スキル・トレーニングが日本人大学生の行動にもたらす変化 日本人観察者による評価の結果から
3. 学会等名 日本社会心理学会第58回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 毛新華
2. 発表標題 中国人留学生の日本文化適応の問題点と解決策に関する探究
3. 学会等名 関西社会心理学研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Xinhua MAO
2. 発表標題 Effects of a Short Intensive Cross-Cultural Adaptation Skills Training Program for Chinese International Students in Japan.
3. 学会等名 The 12th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Masanori KIMURA, Xinhua MAO , & Jinsheng HU
2. 発表標題 Experimental Study of Interpersonal Conflicts and Management Strategies in Collectivistic Culture: Comparison between Japanese and Chinese People.
3. 学会等名 the 19th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Xinhua MAO
2. 発表標題 The Effectiveness of Cultural Social Skills Training Program: An Evidence from Chinese Undergraduate Students.
3. 学会等名 the 31th International Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 毛新華
2. 発表標題 短期集中型の異文化適応スキル・トレーニングの持続効果 来日初期の中国人留学生を対象に
3. 学会等名 日本社会心理学会第57回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 木村昌紀・毛新華
2. 発表標題 日本人と中国人は葛藤状況のコミュニケーションで何が違うのか？ 行動的役割演技法を用いた実験的アプローチ
3. 学会等名 日本社会心理学会第57回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Xinhua MAO
2. 発表標題 The effect of Japanese cultural adaptation skills training programs for Chinese students.
3. 学会等名 the 11th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology (国際学会)
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 Masanori Kimura & Xinhua Mao
2. 発表標題 What are the differences of discussion between Japanese and Chinese people?
3. 学会等名 the 11th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology (国際学会)
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 毛新華
2. 発表標題 中国人留学生を対象とする短期集中型の異文化適応スキル・トレーニングの試み
3. 学会等名 日本心理学会第79回大会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 毛新華・木村昌紀
2. 発表標題 中国文化要素の社会的スキル・トレーニングが日本人大学生の意識と行動に与える影響 - 実験的アプローチによる検討 -
3. 学会等名 日本社会心理学会第56回大会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 木村昌紀・毛新華
2. 発表標題 初対面で愛想のいい遠回しな日本人，親密な友人と本音で議論する中国人 協調的な討論状況における言語コミュニケーションの日本・中国間比較
3. 学会等名 日本社会心理学会第56回大会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 Xinhua MAO & Masanori KIMURA
2. 発表標題 The Conscious and Behavioral Influences of Chinese Cultural Social Skills Training Programs on Japanese People: The Comparison Between Experimental and Control Group.
3. 学会等名 the 17th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 毛新華	4. 発行年 2020年
2. 出版社 北樹出版	5. 総ページ数 52-55
3. 書名 第2章 19. 「家に遊びにおいでよ!」と言われたのに…… [新版] エピソードでわかる社会心理学－恋愛関係・友人関係から学ぶ	

1. 著者名 毛新華	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 183-188
3. 書名 第14章 社会と文化 第4節 文化 エssenシャル心理学	

1. 著者名 毛新華	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 14-21
3. 書名 第2章 心理学の歴史 第2節 心理学の歴史 エssenシャル心理学	

1. 著者名 毛新華	4. 発行年 2017年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 75-81
3. 書名 第4章 人を活かす社会的スキル 3節 スキル・トレーニング シリーズ心理学と仕事10：社会心理学	

1. 著者名 毛新華	4. 発行年 2017年
2. 出版社 北樹出版	5. 総ページ数 52 - 55
3. 書名 第2章 19. 「家に遊びにおいでよ！」と言われたのに…… エピソードでわかる社会心理学－恋愛関係・友人関係から学ぶ	

1. 著者名 毛新華	4. 発行年 2016年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 222-235
3. 書名 第17章 文化理解と適応 対人社会心理学の研究レシピ 実験実習の基礎から研究作法まで	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<http://maoxinhua.com/wp/research/gyoseki>
<https://researchmap.jp/read0134638>
<https://www.kobegakuin.ac.jp/information/public/teacher/psychology/mou.html>

